13　　の最期　　　　　　　　　　 　　　　　　文法　音便

　　読解　主語と具体的行動をつかむ

新傾向　異本の同場面との共通・相違点をつかむ

の戦いで、能登殿（）は、を追い詰めたが打ち漏らし、逆に源氏方のに追い詰められる。

安芸太郎、能登殿を見つて申しけるは、「いかにⓐうましますとも、われら三人取り付いたらんに、たとひ十の鬼なりとも、①などか従へざるべき」とて、主従三人、小船にⓑ乗つて、能登殿の舟に押し並べ、「ゑい」と言ひて乗り移り、のしころをかたぶけ、太刀を抜いて一面にうつてかかる。能登殿ちつとも騒ぎ給はず、まつ先にⓒ進んだる安芸太郎がを、を合はせて海へどうど入れ給ふ。ⓓ続いて寄る安芸太郎をのにとつて挟み、弟の次郎をばの脇にかいばさみ、締めて、「いざうれ、さらばおのれら、死途の山のせよ」とて、生年二十六にて②海へつつとぞ入り給ふ。

語注

十丈＝約三三メートル。

しころ＝首の防御のために、かぶとの左右・後方につけて垂らした部分。

郎等＝家来。

弓手＝左手。

馬手＝右手。

【原文】

安芸太郎、能登殿を見給つて申しけるは、「いかに猛うましますとも、われら三人取り付いたらんに、たとひ長十丈の鬼なりとも、などか従へざるべき」とて、主従三人、小船に乗つて、能登殿の舟に押し並べ、「ゑい」と言ひて乗り移り、甲のしころをかたぶけ、太刀を抜いて一面にうつてかかる。能登殿ちつとも騒ぎ給はず、まつ先に進んだる安芸太郎が郎等を、裾を合はせて海へどうど蹴入れ給ふ。続いて寄る安芸太郎を弓手の脇にとつて挟み、弟の次郎をば馬手の脇にかいばさみ、一締締めて、「いざうれ、さらばおのれら、死途の山の供せよ」とて、生年二十六にて海へつつとぞ入り給ふ。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

安芸太郎は、能登殿を見て「［　　　　　　　　　　］でかかれば、従えられる」と言い、三人で能登殿の船に［　　　　　　　　］、能登殿を襲った。能登殿は騒ぎなさらず、まずは安芸太郎の［　　　　］を海に蹴り入れ、安芸太郎と次郎の二人を両脇にかかえて［　　　］に入りなさった。

問二　波線部ⓐ〜ⓓの語について、音便の種類を次から選び、また、もとの形を答えよ。〈1点×8〉

ア　イ音便　　イ　ウ音便　　ウ　促音便　　エ　音便

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| ⓒ | ⓐ |  |
|  |  | 音便の種類 |
|  |  | もとの形 |
| ⓓ | ⓑ |  |
|  |  | 音便の種類 |
|  |  | もとの形 |

問三　［チェック問題］音便

次の各文について、音便の部分に傍線を引き、音便の種類を問二の選択肢から選べ。〈1点×3〉

1　打つたるの緒締め、…（平家物語）

2　腹帯を解いてぞ締めたりける。（平家物語）

3　このをば、いといたう老いて、…（大和物語）

1〔　　　〕　2〔　　　〕　3〔　　　〕

問四　傍線部①について、

(1)　現代語訳として最も適当なものを選べ。〈5点〉

ア　どうして服従する方がよいのか、いやよくない。

イ　なんとかして服従しないようにできないものか。

ウ　どうして服従させることができないだろうか、いやできる。

エ　何をしても服従させることはできないだろう。

〔　　　〕

(2)　この時の「安芸太郎」の心情に関する説明として最も適当なものを選べ。〈6点〉

ア　能登殿は、自分たちの敵ではないと侮っている。

イ　能登殿に、三人がかりで取り付くのはだと思っている。

ウ　自分たちであれば、能登殿を討てると自信を感じている。

エ　能登殿は、じ気づいて逃げるだろうと高をくくっている。

〔　　　〕

問五　傍線部②は、誰の、どのような行為か。三十字以内で答えよ。〈12点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　本文の内容に合致するものを一つ選べ。〈8点〉

ア　安芸太郎は、能登殿が戦いに疲れているのを見て、三人がかりならばなんとか討ち取ることができるだろうと考えた。

イ　能登殿は、近づいて来る安芸太郎の小船に自分の船を押し並べて、声をあげながら乗り移った。

ウ　安芸太郎と次郎の二人は能登殿を組み伏せようとしたが、を突かれて逆に捕まってしまった。

エ　安芸太郎の郎等が、まず最初に能登殿に襲いかかったが、能登殿はそれに近づいて海に蹴り入れた。

〔　　　〕

問七　『平家物語』には、それを書き写す人の考え方によって、構成や表現などに違いの生じた異本が数多くある。次の【資料】は、鎌倉時代後期に書写されたといわれる異本から、本文と同じ場面を抜き出したものである。本文と【資料】とを比較した内容として適当でないものを一つ選べ。〈8点〉

【資料】

　（安芸太郎）「我等三人組みたらんに、なる鬼神にも組み負けじものを。いざうれ能登殿に組まむ」とて、三人しころを傾けて打ちかかりけるを、能登守先に進む男のしや膝の節を蹴給ひたりければ、海に逆に入りにけり。残り二人しころを傾けて、つと寄りけるを、左右の脇にかひはさみて、しばらく絞めて見給ふに、手当叶ふまじとや思はれけん、少し延び上りて、「さらば、いざうれ」とて、海へつと入られにけり。

ア　安芸太郎らが能登殿に組もうとするとき、本文では「長十丈の鬼」、【資料】では「鬼神」と、どちらにも「鬼」を用いた表現が確認できる。これらの表現には、安芸太郎らの自分たちの強さへの自信をより際立たせる効果がある。

イ　能登殿が敵の一人を海に蹴り入れるとき、本文では「どうど蹴入れ給ふ」と表現されるが、【資料】には「蹴給ひたりければ」と記される。前者の方が「どうど」という音を表す副詞が使われ、よりリズム感がある。

ウ　能登殿が両脇に敵を抱え込もうとするとき、本文には相手の名前が「安芸太郎」「弟の次郎」と記されるが、【資料】では「残り二人」と表現される。前者の方がより具体的に状況を想像できるようになっている。

エ　能登殿が身を投げようとするとき、【資料】では、本文にはない「手当叶ふまじとや思はれけん」という語り手の考えが記される。ここから、能登殿とともに最期を迎える安芸太郎らへの同情が表れた表現であるともいえる。

〔　　　〕

【解答】

問一　われら三人／乗り移り／郎等／海

問二　ⓐ＝イ・猛く　ⓑ＝ウ・乗り　ⓒ＝エ・進み　ⓓ＝ア・続き〈1点×8〉

問三　1＝打つ／ウ　　2＝解い／ア　　3＝いたう／イ〈1点×3〉

問四　(1)＝ウ〈5点〉

　　　(2)＝ウ〈6点〉

問五　能登殿の、安芸太郎と次郎を道連れにして自害しようとする行為。（30字）

〈12点〉

問六　エ〈8点〉

問七　エ〈8点〉

【現代語訳】

安芸太郎が、能登殿を見なさって申し上げたことには、「どれほど勇猛でいらっしゃっても、われら三人で取り付いたならば（その時に）、たとえ身の丈が十丈の鬼であるとしても、どうして服従させることができないだろうか、いやできる」と言って、主従三人が、小舟に乗って、能登殿の船に押し並べ、「えい」と言って（安芸太郎らは能登殿の船に）乗り移り、甲のしころを傾け、太刀を抜いていっせいに打ってかかる。能登殿は少しも騒ぎなさらず、真っ先に進んだ安芸太郎の家来を、裾を合わせるほどに近づいて海へどうっと蹴り入れなさる。続いて近寄る安芸太郎を左腕の脇に取り付いて挟み、弟の次郎を右腕の脇にかき挟み、ひと締め締めて、「さあ、それではお前ら、死出の山への供をせよ」と言って、生年二十六で海へさっと入りなさる。

【資料】現代語訳

　（安芸太郎は）「我ら三人が組んだとすればその時は、どのような鬼神にも負けないだろうに。さあ、能登殿に取っ組み合おう」と言って、三人は（甲の）しころを傾けて打ってかかったのだが、能登殿が先に進んだ男の膝の節を蹴りなさったので、（男は）海に逆さまに入ってしまった。残りの二人がしころを傾けて、さっと寄ったのを、（能登殿は）左右の脇に挟んで、少しの間絞めて見なさると、手立ては叶わないだろう（＝これ以上どうしようもない）とお思いになったのだろうか、（能登殿は）少し伸び上がって、「それならば、さあ」と言って、海へすっと入りなさった。

【補充問題】

問１　「能登殿ちつとも騒ぎ給はず」（４行目）からうかがえる能登殿の様子として、最も適当なものを選べ。

ア　安芸太郎らにじ気づきながらも、精一杯戦おうとしている。

イ　予期できない強さの敵に身構えながら、闘志をたぎらせている。

ウ　安芸太郎が弱いことを知っていて、心の中で嘲笑している。

エ　武芸に自信があり、危機的な状況でも沈着冷静にふるまっている。

問２　「いざうれ～供せよ」（６行目）とあるが、能登殿はなぜこのようにしたのか。最も適当なものを選べ。

ア　安芸太郎と次郎は、本来ならば自分の家来になるべき存在だと感じたから。

イ　討ち取られて敵の手柄になるよりは、いっそのこと自分だけ自害しようとしたから。

ウ　自らの劣勢を悟り、どうせ死ぬならば敵を道連れにしたいと思ったから。

エ　何とか生き残るためには、降伏して敵方に寝返るしかないと考えたから。

【補充問題解答】

問１　エ

問２　ウ